

異文化間教育学会 第 39 回大会

プログラム 目次

異文化間教育学会 第 39 回大会ご挨拶	1
大会参加者へのご案内	2
大会日程	4
会場へのアクセス	5
アクセスマップ	6
キャンパスマップ	8
会場案内	9
フロアマップ	10
プレセミナー	11
特定課題研究	12
第 39 回大会企画 公開シンポジウム	19
若手交流会	20
発表について	22
異文化間教育学会「優秀発表賞」について	23
研究発表プログラム	24
個人発表	25
共同発表	30
ケース／パネル発表	33
ポスターセッション	35
第 39 回大会賛助団体ご芳名	170
異文化間教育学会第 39 回大会準備委員会	175

異文化間教育学会 第 39 回大会 ご挨拶

2018 年の異文化間教育学会年次大会は、日本海側唯一の政令指定都市の新潟市にある新潟大学で開催させていただくことになりました。

新潟大学は、1870 年に設立された共立病院を前身とする総合大学で 11 学部、6 研究科及び別科があり、総学生数は約 12,400 人、教職員数は約 3,000 人おります。キャンパスは五十嵐キャンパスと旭町キャンパスに分かれ、五十嵐キャンパスは 9 学部、4 つの大学院、附属図書館などがあり、緑に囲まれ建物上層階からは日本海や佐渡島を望むことができます。旭町キャンパスは、医学部、歯学部、2 つの大学院、脳研究所、医歯学総合病院があります。2019 年には新潟港が開港 150 周年を迎えますが、新潟大学も海港都市の進取の精神に基づき、自律と創生を全学の理念に掲げています。日本海側ラインの中心新潟に位置する大規模総合大学として環東アジア地域を基点に世界を見据え、教育と研究及び社会貢献に寄与することを全学の目的としています。

大会が開催される五十嵐キャンパスは、新潟駅から少し離れており、みなさまに交通のご不便をおかけすることになるかもしれません。しかしながら、自由な学術的意見交換や新たな情報交換のネットワーク構築が活発にできるよう、新潟らしい企画でみなさまをお迎えいたします。田舎の強みをフルに活かし、広い場所でみなさまにのびのびと研究発表をしていただき、今後の研究がさらに一步前進できることを確信しております。

さらに、研究以外にも、お越しいただいたみなさまに、温泉、米、日本酒等、新潟ならではの特色を堪能していただき、さまざまな対話が生まれるような企画をスタッフ一同でいろいろ工夫しているところです。旧知の研究仲間に会うため、また新しい研究仲間のネットワーク作りのためにも新潟にお越しく下さい。何よりもみなさまのご参加を心よりお待ちしております。

異文化間教育学会
第 39 回大会準備委員会
委員長 足立 祐子

大会参加者へのご案内

大会日程

大会会期：2018（平成 30）年 6 月 9 日（土）－ 6 月 10 日（日）

会 場：新潟大学五十嵐キャンパス 総合教育研究棟 B 棟

※情報交換会：2018 年 6 月 9 日（土） 16:30-17:45

会場：新潟大学五十嵐キャンパス総合教育研究棟 B 棟入りロホール

※プレセミナー：2018 年 6 月 8 日（金） 13:00-16:30

会場：新潟大学駅南キャンパスときめいと講義室 A

参加資格

会員・非会員を問わず、どなたでもご参加いただけます。

参加申し込み

事前申し込みをされる方は、大会参加費を、5 月 15 日（火）までにお振込みください。

5 月 16 日以降は、大会当日に当日料金をいただくこととなりますことをご了承ください。

web 入力をお願い

5 月 15 日（火）までに参加申し込みを希望される方は、会員・非会員とも以下の第 39 回大会ホームページ内「参加・発表の申し込み」ページよりお手続きください。

(<http://www.intercultural.jp/iesj2018/apply.html>)

大会参加費

		事前料金 (5 月 15 日まで)	当日料金
大会参加費	正会員	5,000 円	6,000 円
	学生会員	3,000 円	4,000 円
	通信会員	5,000 円	6,000 円
	非会員（一般）	6,000 円	7,000 円
	非会員（学生）	4,000 円	5,000 円
	維持会員	1 口 1 名様無料	7,000 円
	名誉会員	ご招待	

情報交換会

参加費：1 律 1,000 円

学生の皆さん他、できる限りいろんな人に大勢参加していただけるように、従来の懇親会とは形を変えて、情報交換会を開催いたします。会場にはソフトドリンクとスナックをご用意いたします。また、せっかくの機会ですので、新潟のお酒もワンコイン(500 円参加費とは別料金)でお試しいただけます。

※お払い込みいただいた参加費などは、理由を問わず返却いたしません。予めご了承ください。

- 参加費をお振込みいただく際は、参加者1名につき1枚の払込取扱票をご使用ください。領収書は、当日に受付でお渡しいたします。
- 6月9日(土)は午前9時より、10日(日)は午前9時45分より受付を行いません。受付にて名札をお受け取りいただき、大会会期中はその名札をご着用ください。
- 特定課題研究、公開シンポジウム、個人発表、共同発表、ケース/パネル発表、ポスターセッションの発表者および司会者の方は「発表者・司会者受付」にお越しください。
- 学内の駐車場がご利用いただけますが、駐車できる数に限りがありますので、できる限り公共交通機関をご利用ください。
- 6月9日、10日は週末のため、学生食堂及び学内のカフェは営業していません。昼食には学内のコンビニか、大学周辺のコンビニなどをご利用下さい。
- 宿泊は各自でご手配ください。

連絡先

大会・Web申し込み・お支払いに関するお問い合わせ

異文化間教育学会大会ヘルプデスク

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5 (株)国際文献社内

E-mail : iesj-desk@bunken.co.jp

Fax : 03-5227-8632

会員登録に関するお問い合わせ

異文化間教育学会事務局会員業務係

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5 (株)国際文献社内

E-mail : iesj-post@bunken.co.jp

Fax : 03-3368-2822

大会当日に関するお問い合わせ

第39回大会準備委員会

〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町 8050

新潟大学グローバル教育センター 足立祐子研究室内

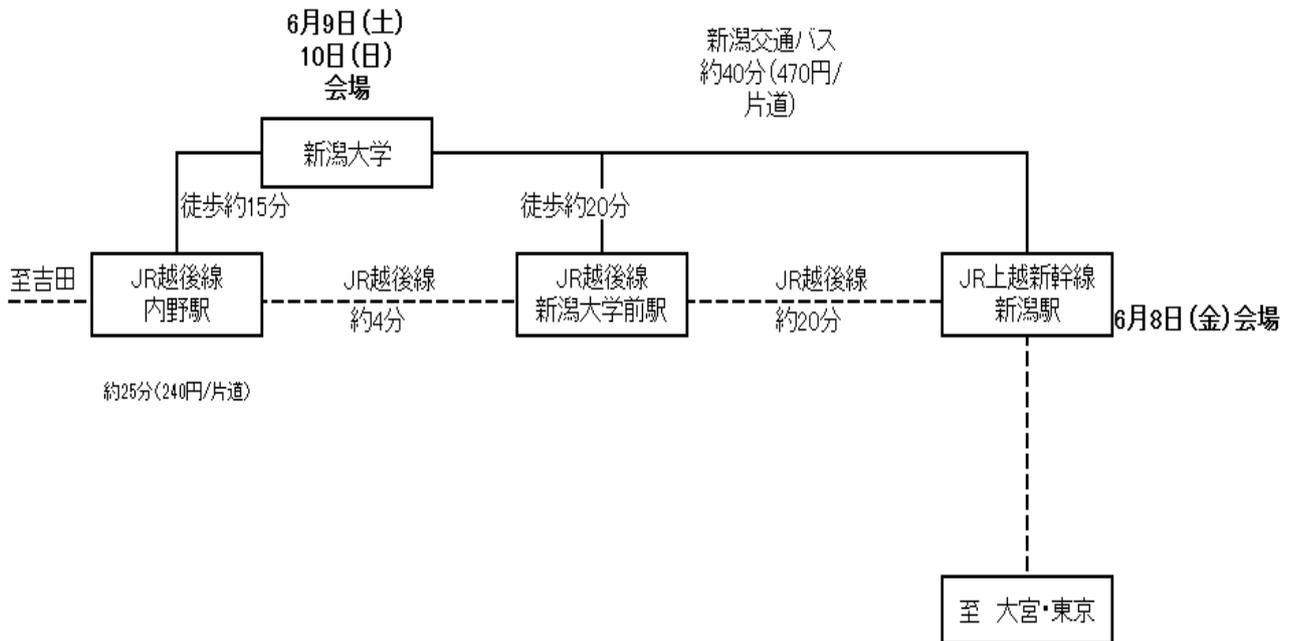
E-mail: ibunkakan39@gmail.com

大会日程

	6月8日(金)	6月9日(土)			6月10日(日)		
9:00		9:00-受付			9:45-受付		
9:30		9:30-10:30 ポスターセッション					
9:45							
10:00		10:30-12:00 個人発表	10:30-12:00 ケース/パネル	※10:30-12:00 ポスターセッション	10:00-12:00 個人発表	10:00-12:00 共同発表	※10:00-15:00 ポスターセッション
10:30							
12:00		12:00-13:00 昼食	12:00-13:00 若手交流会	12:00-13:00 紀要編集委員会 広報・情報化委員会 企画・交流委員会	12:00-13:00 昼食	12:00-13:00 若手交流委員会 研究委員会	
12:30	12:30- 受付						
13:00	13:00-16:30 プレセミナー 「内なる多様性を豊かに育むにはーマインドフルネスを使った体験型ワークショップー」	13:00-14:00 総会			13:00-15:00 公開シンポジウム 「次の世代を地域で育てるー異文化間教育の役割ー」		
14:00		14:00-16:30 特定課題研究 「政策的視点からの異文化間教育研究ー課題と展望」					
14:30							
15:00							
16:30		16:30-17:45 情報交換会					
17:00	17:00-19:00 理事会						

※ 1日目9:30-10:30のポスターセッションについては、発表者に必ず在席していただきます。
1日目10:30-12:00、2日目10:00-15:00のポスターセッションは、任意の在席となります。

会場へのアクセス



※新潟大学前駅は、会場への最寄の駅ではありませんのでご注意ください。

近隣公共交通機関からの所要時間



キャンパスマップ

五十嵐キャンパス

総合教育研究棟 (S10) ■人文学部 ■創生学部

○キャリアセンター ○入試課
○学生窓口(学生支援課・教務課) ○留学交流推進課

人文社会科学系棟 (H1) ■法学部 ■経済学部

教育学部棟 (H2) ■教育学部 ■大学院教育学研究科
■養護教諭特別別科 ○全学教職支援センター

理学部棟 (N1) ■理学部 ○サイエンスミュージアム

工学部棟 (N2) ■工学部

農学部棟 (N3) ■農学部

大学院現代社会文化研究科棟 (H4)

■大学院現代社会文化研究科

大学院自然科学研究科棟 (N4)

■大学院自然科学研究科 ■大学院技術経営研究科

総合研究棟(情報理工系) (N5)

総合研究棟(物質・生産系) (N6)

総合研究棟(生命・環境系) (N7)

総合研究棟(環境・エネルギー系) (N8)

災害・復興科学研究所 (S7)

事務局棟 (S1)

松風会館 (S2)

有朋会館(宿泊施設) (S3)

保健管理センター (S4)

附属図書館 (S5)

情報基盤センター (S6)

学生寄宿舎 (S8)

国際交流会館 (S9)

産学連携共同研究棟2号棟 (S11)

○連携教育支援センター

産学連携共同研究棟1号棟 (S12)

職員宿舎 (S13)

総合案内所・守衛所 (S14)

悠久会館 (S15)

男女共同参画推進室 (S16)

産学地域連携棟 (S17)

環境安全推進室 (S18)

危機管理センター (S19)

厚生センター(生活協同組合) (W1)

○購買部 ○書籍部 ○サービスセンター ○ATM

第1学生食堂 (W2)

第2学生食堂 (W3)

大学会館・第3学生食堂 (W4)

第1体育館 (W5)

第2体育館・第3体育館 (W6)

武道場 (W7)

トレーニング施設 (W8)

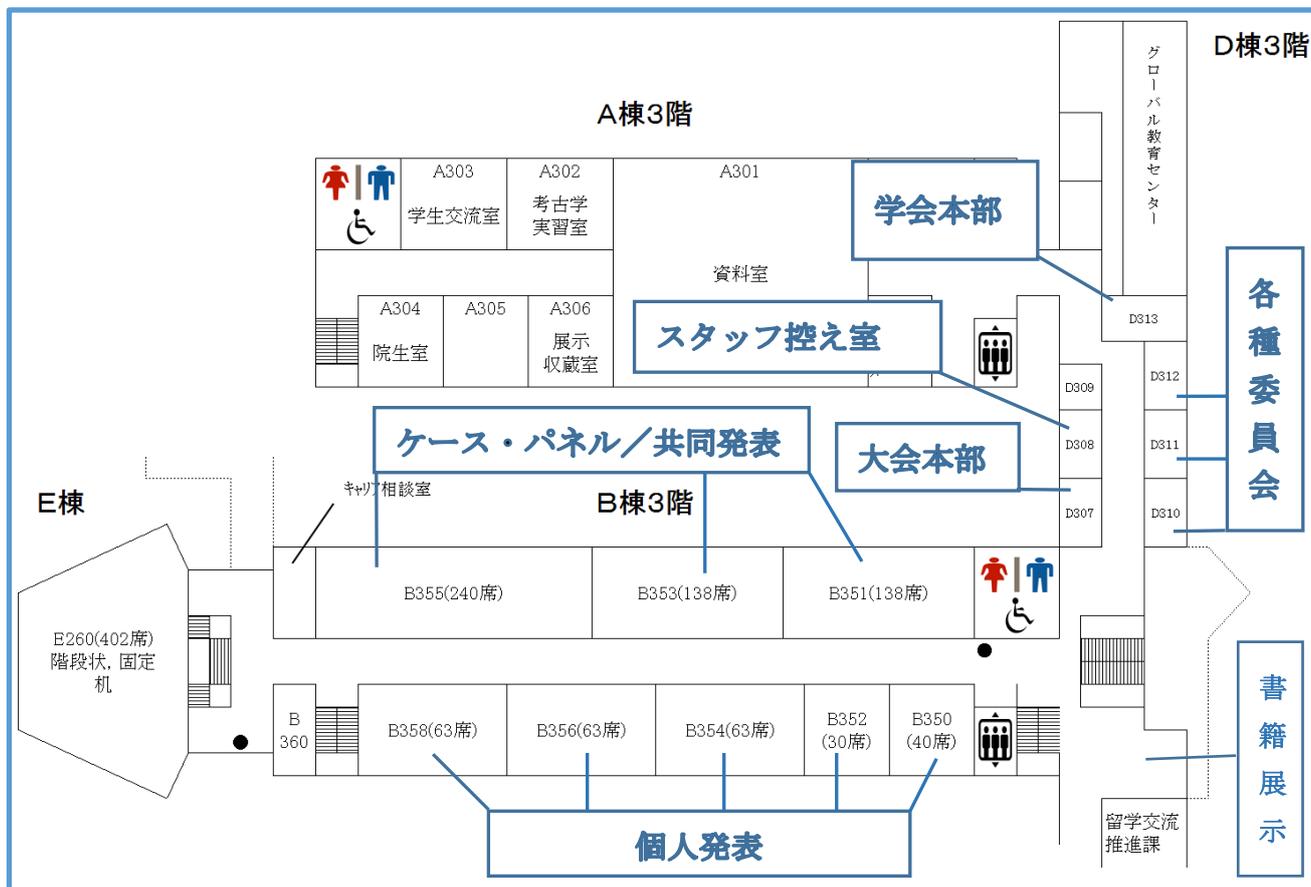
LAWSON, NIIGATA UNIVERSITY (W9)

○ATM

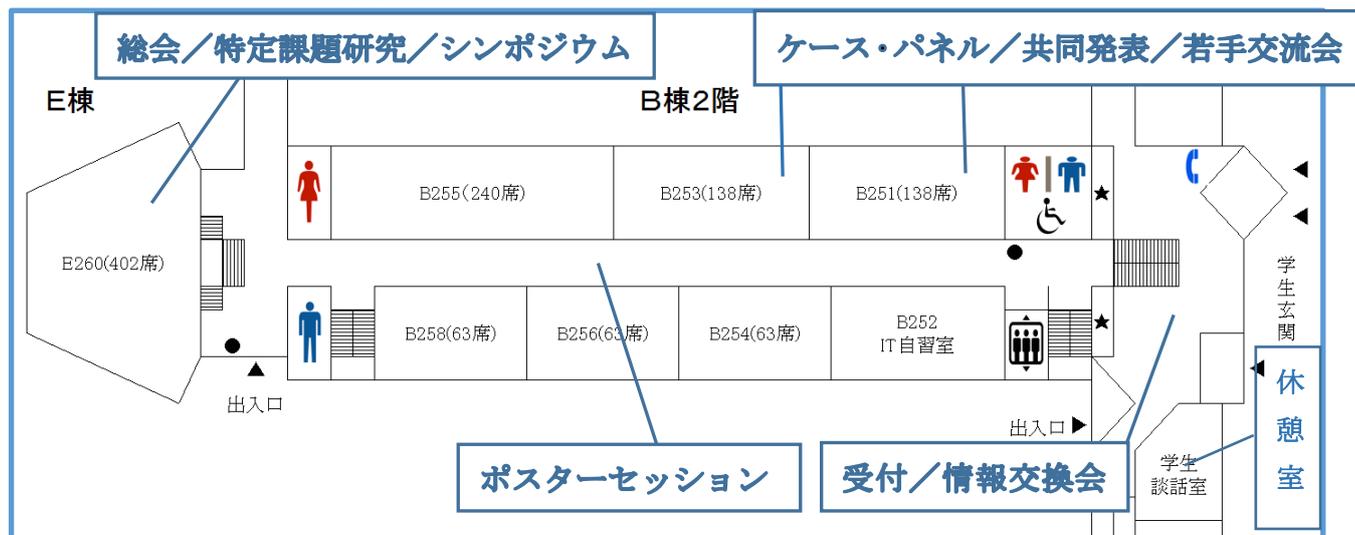


フロアマップ

五十嵐キャンパス 総合教育研究棟 3階



五十嵐キャンパス 総合教育研究棟 2階



※クロークはありませんので、荷物は各自で管理してください。

会場案内

大会前日 6月8日(金)	新潟大学 駅南キャンパスときめいと 講義室 A	
プレセミナー受付	12:30-	
プレセミナー	13:00-16:30	
理事会	17:00-19:00	新潟大学 駅南キャンパスときめいと 講義室 A
大会第1日 6月9日(土)	新潟大学 五十嵐キャンパス 総合教育研究棟 B棟 (D/E棟も一部利用)	
受付	09:00-	2階 入り口ホール
ポスターセッション	09:30-12:00	2階 教室前廊下
ケース/パネル	10:30-12:00	B251/B351/B353/B355 教室
個人発表	10:30-12:00	B350/B352/B354/B356/B358 教室
若手交流会	12:00-13:00	B253 教室
総会	13:00-14:00	E棟 E260 教室
特定課題研究	14:00-16:30	E棟 E260 教室
各種委員会		(総合教育研究棟 D棟 3階)
紀要編集委員会	12:00-13:00	D312 教室
広報・情報化委員会	12:00-13:00	D311 教室
企画・交流委員会	12:00-13:00	D310 教室
情報交換会	16:30-17:45	2階 入り口ホール
大会第2日 6月10日(日)	新潟大学 五十嵐キャンパス 総合教育研究棟 B棟 (D/E棟も一部利用)	
受付	09:45-	2階 入り口ホール
個人発表	10:00-12:00	B350/B352/B354/B356/B358 教室
共同発表	10:00-12:00	B251/B253/B351/B353/B355 教室
ポスターセッション	10:00-15:00	2階 教室前廊下
公開シンポジウム	13:00-15:00	E棟 E260 教室
各種委員会		(総合教育研究棟 D棟 3階)
研究委員会	12:00-13:00	D311 教室
若手交流委員会	12:00-13:00	D310 教室
■大会本部		総合教育研究棟 D棟 D307 教室
■学会本部		総合教育研究棟 D棟 D313 教室
■昼食会場	12:00-13:00	個人発表後の B350/B352/B354/B356/B358 教室
■休憩室		2階 学生談話室
■書籍展示		3階 入り口ホール

※クロークはありませんので、荷物は各自で管理してください。

プレセミナー

日時：2018年6月8日（金）13:00～16:30（受付開始 12:30）

場所：新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」講義室 A

「内なる多様性を豊かに育むには ーマインドフルネスを使った体験型ワークショップー」

■ 企画趣旨

地域コミュニティや学校等で多文化理解や多文化共生を促進する活動を行っていくには、多様性に開かれた態度を培うことが非常に重要だといえます。しかし、私たちは自分の外にある文化や多様性に対する理解を深めようとすることは多くても、内的多様性、つまり自分の内側にある様々な気持ちや考え、アイデンティティに目を向けて、それらを認め、寛容な態度で受け入れていこうとすることは少ないのではないのでしょうか。

今回のワークショップでは、マインドフルネスやイメージワークなど、カウンセリングの技法を活用して自分の内側にある多様性に耳を傾けます。そして、それらを自分自身が受け入れ、調和的な関係を構築する方法を体験的に学びます。

■ 講師

平井 達也氏（立命館アジア太平洋大学教育開発・学修支援センター 准教授）

略歴：フルブライト奨学生としてミネソタ大学大学院にて博士号（Ph. D. カウンセリング心理学）を取得。ミネソタ大学留学生センターカウンセラー、カリフォルニア大学サンディエゴ校カウンセリングセンターカウンセラー、九州大学非常勤カウンセラー、九州産業大学国際文化学部臨床心理学科常勤講師などを経て、現職。主な専門領域は、キャリアカウンセリング、異文化間カウンセリング、グループアプローチ、ポジティブ心理学。自身の見識を深めるため、2017年4月から9月までサバティカルを利用し、15か国を周り12の研修や学会に参加。

コーディネーター：大船 ちさと氏（国際交流基金 日本語国際センター）

特定課題研究

日時：平成 30 年 6 月 9 日（土）14：00～16：30

場所：新潟大学五十嵐キャンパス 総合教育研究棟 E 棟 E260 教室

「政策的視点からの異文化間教育研究——課題と展望」

本特定課題研究では、長年に亘り重要性が指摘されながらも、ほとんど行われてこなかった政策的視点からの異文化間教育研究に挑む。政策的視点からの異文化間教育研究の意義と現状を考察したうえで、「異文化間教育の政策研究」と「異文化間教育政策の研究」の可能性を、具体的事例を基に検討する。そのうえで、新たな知の創造に向けて、どのような概念的枠組みや方法論での研究が可能なのかについて、議論を深めたい。次年度は、今回の成果を踏まえたうえで、諸外国や国内の実践に学びながら、政策提言につながる研究を行う予定である。

司会：

工藤和宏（獨協大学）

発表：

1. 工藤和宏

「政策的視点からの異文化間教育研究の意義と現状」

2. 徳井厚子（信州大学）

「外国人児童就学支援事業の構築・再構築過程—長野の事例から—」

3. 額賀美紗子（東京大学）

外国人家族の《見えない》子育て困難と支援ニーズ
—外国人散在地域における草の根運動からの問題提起—

指定討論：

小林葉子（岩手大学）

全体討議

政策的視点からの異文化間教育研究の意義と現状

工藤和宏（獨協大学）

1. はじめに

異文化間教育研究は、学際性と実践性という特徴とともに、二つの志向性を持ちながら発展してきた（工藤, 2016）。ひとつは、文化的差異に対して個人が修得または発揮すべき素養の向上である。もうひとつは、個人・集団・組織が文化的差異を超克または活用する（社会的）空間・規範の創成である。

これらの志向性を持った研究が発展する一方で、異文化間教育研究の課題として、政策的視点ないし政策研究の必要性（山田, 2008, 2009; 佐藤, 2016）が語られてきた。とくに強調されているのは、マクロなレベルの研究の重要性（江淵, 1996）と、学会の社会的意義（佐藤ほか, 2016）である。

本発表の目的は、先行研究の知見を活用しながら政策的視点からの異文化間教育研究の意義と現状を整理することである。そのうえで、今後の異文化間教育研究への示唆を述べたい。

2. 政策的視点からの異文化間教育研究の意義

政策の定義は実に様々であるが、Scott (2014) によると、政策には以下の要素がある。

- (1) 特定領域の行動に関する、一連の思考、意図、目的（変化の方向性）の表明である。
- (2) 文章化され、意思決定機関によって公に定められている。
- (3) 無行動や現状維持も政策を構成する。

これらの要素を念頭に置きながら、本節では、政策研究・政策科学の知見およびシステム理論を参考に、異文化間教育における政策的視点の意義を、異文化間教育の実践と政策の関係の観点から論じたい。具体的には、以下の命題を提示する。

命題1 異文化間教育の実践（過程・効果）とは、マイクロ（個人）・メゾ（状況）・マクロ（組織・制度）レベルの相互作用（一致、不一致、アンビバレンス）である。

命題2 政策とは、実践の「触媒」である。

これらの命題を図示した概念的枠組に基づき（図1参照）、政策的視点からの異文化間教育研究の意義を考えると、次のことがいえる。すなわち、マクロの次元の焦点化により、レベル間の相互作用の視点が生まれ、異文化間教育の実践の過程や効果をホリスティック（全体的）にとらえることができる。とくに、レベル間の不一致やアンビバレンスに注目することで、実践現場が抱える問題の根本的な原因や抜本的な解決方法を探ることができるのは、政策的視点の強みである。

3. 政策的視点からの異文化間教育研究の現状——段階モデルに基づく考察

先行研究の現状を整理するにあたり、本発表では、山田（2009）が紹介した濱中（2008）による高等教育の政策論議の区分に倣い、政策的視点からの異文化間教育研究を「異文化

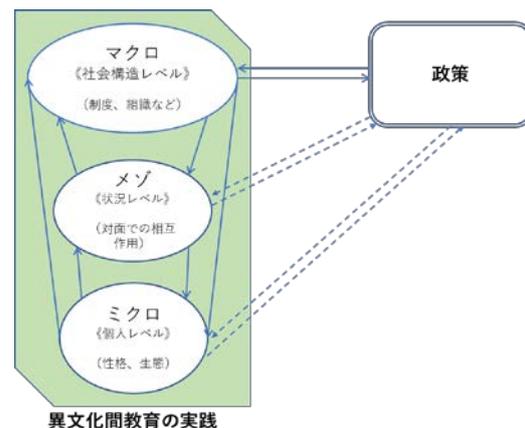


図1 異文化間教育の実践と政策の関係: Pettigrew & Hewstone (2017)を応用

間教育の政策研究」と「異文化間教育政策の研究」に分ける。前者は、個人や教育現場の実態をみたうえで、必要な政策を考える研究（政策を提言する研究）をさす。後者は、（異文化間教育に関する）政策から問いを立て実態・施策を検証、政策議論にもどる研究（政策・施策の内容・効果を分析する研究）のことをいう。どちらのアプローチにも記述的側面（現状確認・原因探求）と規範的側面がある。

さらに、政策的視点からの異文化間教育研究の現状を整理するため、本節では政策過程の段階モデル（ファウラー、2008）を用いる（図2参照）。このモデルに基づき先行研究を概観すると、以下の現状と課題が浮かび上がる。「異文化間教育の政策研究」については、政策争点の定義から政策決定までについての研究が不足している。よって、まずは、政策争点を同定し定義する研究が必要である。また、どのような研究方法が可能なのか、たとえば、「現場生成型研究」（佐藤ほか、2006）がどの程度政策研究に有効なのかを検討することも重要だろう。一方、「異文化間教育政策の研究」については、政策科学に基づく、政策実施（施策）と政策評価（事後評価）の研究（留学生政策、言語教育政策など）が散見されるが、研究の焦点は限定的である。とくに「異文化間の視点」のどの部分を、どのように研究に反映させるのかは、異文化間教育研究にとっての重要課題である。

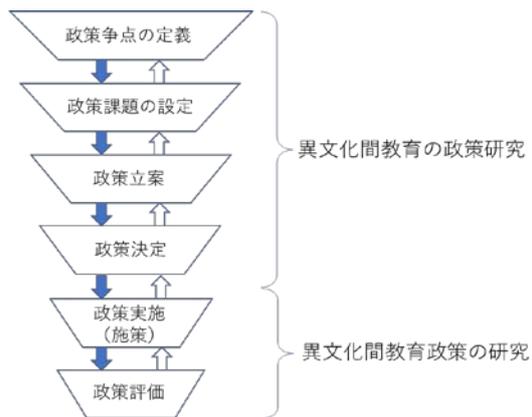


図2 古典的段階モデル：ファウラー（2008）を応用

4. おわりに——異文化間教育研究（のあり方）への示唆

以上、政策的視点からの異文化間教育研究の意義と現状について述べたが、これらが示唆するのは、価値、イデオロギー、権力をどの程度、また、どのように取り上げるべきかという根本的な問いに答えることの重要性である。更なる学際的アプローチや研究分野間・ステイクホルダー間の越境的な協働による、刺激的な研究の展開にも期待したい。

引用文献

- 江淵一公（1996）「異文化間教育学の可能性——問題提起」『異文化間教育』10, 4-26.
- 工藤和宏（2016）「異文化間教育学における実践的な手法」佐藤郡衛、横田雅弘、坪井健（編）『異文化間教育のフロンティア』明石書店, 101-116.
- 佐藤郡衛（2016）「異文化間教育学の到達点と今後の研究課題」異文化間教育学会企画、佐藤郡衛・横田雅弘・坪井健（編）『異文化間教育のフロンティア』明石書店, 13-28.
- 佐藤郡衛、横田雅弘、坪井健（2016）「異文化間教育学研究の課題と展望」佐藤郡衛・横田雅弘・坪井健（編）『異文化間教育のフロンティア』明石書店, 208-215.
- 佐藤郡衛、横田雅弘、吉谷武志（2006）「異文化間教育学における実践性——『現場生成型研究』の可能性」『異文化間教育』23, 20-36.
- 濱中真理（2006）『『高等教育政策の研究』と『高等教育の政策研究』』『日本高等教育学会ニューズレター』21, 5-6.
- ファウラー・F・C（堀和郎 監訳）（2008）『スクールリーダーのための教育政策研究入門』東信堂.
- 山田礼子（2008）「異文化間教育 25 年間の軌跡——大会発表と学会紀要から見る研究動向」『異文化間教育』27, 47-61.
- 山田礼子（2009）「多文化共生社会をめざして——異文化間教育の政策的課題」『異文化間教育』30, 12-24.
- Pettigrew, T. F., & Hewstone, M. (2017). The single factor fallacy: Implications for missing critical variables from an analysis of intergroup contact theory. *Social Issues and Policy Review*, 11 (1), 8-37.
- Scott, J. (2014). *Oxford dictionary of sociology* (4th ed.). Oxford: Oxford University Press.

外国人児童就学支援事業の構築・再構築過程

—長野の事例から—

徳井厚子（信州大学）

1. はじめに

法務省によれば、2017年末の日本国内の在留外国人の数は2,561,848人と過去最高になっている。全国的には、リーマンショックの際に一時落ち込んだが、その後急速に伸びている状況である。これに対して、地方は必ずしも全国の傾向と同じ状況ではない。例えば、長野県においては、在留外国人の数は2005年には44,726人とピークを迎えたが、リーマンショック以降県内の景気の減退により減少傾向にあり、2017年末には32,937人となっている。2004年～2011年まで長野県内で10校程度あったブラジル人学校は、その後減少を続け、2018年3月現在、1校となっている。

杉澤（2016）は、地域における問題として「自治体においては、『多文化共生』施策としてさまざまな事業が実施されるようになるが、分野横断的、複合的に絡み合っているため、問題の所在を把握することが難しく、対症療法的な対応に止まっている」ことを挙げている。地域における外国人支援施策の課題として、地域独自の文脈や問題を考慮した施策の必要性、複雑な問題を多様な組織（分野）と協働し解決する必要性、対症療法的な施策ではなく長期的な施策を行う必要性が挙げられる。

異文化間教育政策の研究の課題としては、施策（政策）がどのように構築・再構築されていったのかその過程を見ていくことの重要性が挙げられる。また、その過程において、マクロ、ミクロ、メゾのそれぞれのレベルがどう相互に影響を及ぼしているのかという観点から考察することの重要性も挙げられる。

本研究では、2002年より長野県で行っている外国籍児童就学支援事業（別名：サンタプロジェクト）を例に挙げ、15年間という時間軸の中で事業がどのように構築・再構築されてきたかその過程について、マクロ・メゾ・ミクロの関わりという観点から分析を行う。発表者は、この事業における委員の一人として15年間関わってきている。なお、本稿では、外国籍児童就学支援事業（サンタプロジェクト）を「S事業」と略す。

2. 外国籍児童就学支援事業（S事業）の構築・再構築過程

S事業のきっかけは、外国籍住民の増加とそれに伴うブラジル人学校の増加および外国人児童の不就学の問題である。S事業は、主に母国語教室（ブラジル人学校）の支援のために、ボランティアと行政、企業の協働により、設立された。設立に至る過程で、ボランティアと行政間で事業を立ち上げようとしていたが、この二者間の関係では支援の実現に限界があった。しかし、その後企業が加わり三者間の中で関係が再構築されることにより、事業の設立が可能となった。この関係の再構築のキーパーソンとなったのは、当時の県職員のK氏である。ボランティアの「企業が社会的責任を果たすべき」という声を聴き、企業側にその「声」を届け、企業が加わったことにより施策の実現が可能となった（熊谷2008）。

S事業の内容については、この15年間において表に示す通り再構築を繰り返している。S事業の設立の際には支援の内容が学費、設備費のみであった。その後委員のメンバーによるブラジル人学校現場の視察から、教科書代を追加した。また、委員のメンバーから「支援の対象は、ブラジル人学校だけでよいのか」というクリティカルな意見が出されたことがきっかけで、日本語教室への支援を追加した。その後リーマンショックという予想外の出来事がおき、その影響で多くの児童たちに学費の支援が必要となり対象を拡大した。そ

の後リーマンショックの影響から病人が増加し、一部の地域で医療通訳の活動がネットワーク活動となったことがきっかけで健康診断の支援を追加した。その後のブラジル人学校の減少に伴い、地域の日本語教室と学校を結ぶ日本語支援コーディネーター事業を追加した。マクロ、ミクロ、メゾのレベルの関係から、S事業の再構築過程をみていくと次の表のようになる。

表 外国籍児童就学支援事業（S事業）の構築・再構築過程

	ミクロレベル 外国籍住民・子ども 支援者	メゾレベル 組織（サンタプロジェクト委員会）事 業、団体	マクロレベル 社会
設立時 2002	不就学の児童の増加→ ブラジル人学校の児童 の増加	ボランティア団体+行政関係者+企業 ↓ S事業の成立 ブラジル人学校の学費・設備費の支援	← 外国籍住民の増加
2005 頃	ブラジル人学校 現場 高価な教科書代	← ブラジル人学校視察 → 教科書代の支援追加	
2006 頃		委員の意見 支援対象の問い直し ↓ 日本語教室への支援の追加	
2008 頃	家族の生活の困窮 →	支援内容の見直し 支援対象の拡大	← リーマンショック
2014 頃	病人の増加 ↓ 医療通訳の活動 →	草の根レベルの医療通訳のネットワー ク活動 ↓ 健康診断の支援の追加	← リーマンショック
2016 頃		支援内容の見直し 日本語支援コーディネーター事業追加	←ブラジル人学校の減 少

3. 考察と課題

S事業の構築・再構築過程を見てみると、これらの過程には、メゾレベルのみで解決・決定していたわけではなく、メゾレベルとミクロレベル、マクロレベルが相互に影響し合っ
て事業の再構築につながっていることがわかる。またリーマンショックといった予想しな
いマクロな社会的状況の変化に対してメゾレベルで対応し決定したケースや、医療通訳の
活動がミクロなレベルで始まり、ネットワーク活動というメゾレベルに発展したという偶
然の出来事が、「健康診断の支援の追加」につながったというケースも見られた。異文化間
教育政策の研究においては、マクロ、ミクロ、メゾのレベルを動的に往還させていく視
点が重要であるといえるだろう。また、メゾレベルにおいて多様なメンバーによるコミ
ュニケーションも重要であるといえる。さらに、支援自体をクリティカルに問い直して
いく視点も必要であるといえる。また、予想しない出来事や偶然の出来事をどう事業（
施策）に取り込むか、社会的状況の変化に対応していくことも今後の課題として挙げら
れる。

引用文献

- 熊谷晃（2008）「子どもたちの「学び」を支えよう～サンタ・プロジェクトとその意義～」『共生-ナガノの
挑戦』信濃毎日新聞社
杉澤経子（2016）「多文化社会における人材の育成」『異文化間教育のフロンティア』明石書店

外国人家族の《見えない》子育て困難と支援ニーズ —外国人散在地域における草の根運動からの問題提起—

額賀美紗子（東京大学）

日本に住む外国人の親の出産数は近年増加傾向にあり、外国人集住地域の中には外国人家族に対する子育て支援施策を推進している自治体もみられる（例：愛知県、神奈川県、横浜市など）。一方、外国人住民の数が少なく、特定のエスニックグループの集住がみられないような外国人散在地域においては、外国人家族のニーズを反映した子育て支援施策は見当たらない。2015年に子ども・子育て支援制度が施行されたことを受けて自治体の子育て支援は拡充する傾向にあるが、それらのサービスが前提とするのは日本人の利用者である。ホスト社会の制度が移民にとって様々な理由から利用しづらいことが国内外の研究において指摘されているが（南野, 2015）、子育て支援についても同様の事態が懸念される。外国人家族がホスト社会の子育て支援サービスにつながることは、子どもの発達や教育機会を保障していく上でも不可欠であり、外国人家族を地域社会に包摂する子育て支援施策を実施していくことが地域の多文化共生を実現する上でも重要な課題である。

本報告では、異文化間教育の政策研究という視点に立ち、外国人散在地域における外国人家族の子育て支援施策への含意をフィールド調査から導くことを考えてみたい。キー概念となるのは「制度的可視性（institutional visibility）」である。「制度的可視性」とは移民が自治体の諸制度の中で住民としてその存在を認められている程度を指し、それは地域における移民への支援や包摂のありかたに大きな影響を与える（Winders, 2012）。一般的に外国人散在地域では外国人の制度的可視性は低い。外国人家族に対する子育て支援を拡充するためには、まずかれらの制度的可視性を高めることが求められる。そのために必要な研究は、外国人家庭の抱える子育ての問題をミクロな個人の次元から、メゾ、マクロな次元へと引き上げ、行政をはじめとする組織間の連携の中で解決を図っていくことを志向しつつ、その過程を規範的にではなく経験的に分析するような研究である。

本報告ではこうした視点に立ち、外国人の子育て支援を行う現場の取り組みから、外国人散在地域における外国人家族の制度的可視性の高まりとその限界を考察する。特にその過程における民間市民団体の役割と行政との連携について注目したい。使用するデータは2014年から現在にかけて報告者が東京都西部の二市（三鷹・武蔵野）を拠点に外国人支援活動を行う民間支援団体 P において行ったフィールドワークおよび、その団体経由で知り合った外国人母親たち、市の子ども育成課、国際交流協会、保健センター、保育園でのインタビューである。報告者は調査者であると同時に乳幼児を育てる母親として P 団体の子育て支援活動に参加し、外国人の母親たちの通訳・翻訳、相談役、子育てサークルのオーガナイザーなどを務めた。

1. 見えにくい外国人の子育てニーズ

外国人のニーズが政策課題となりにくい地域の場合、外国人家族の困難やニーズは日本人と外国人家族が会う現場の中で顕在化し、初めて支援の対象とみなされる。保健センター、国際交流協会、民間の外国人支援団体のスタッフは、外国人家族が既存の子育てサービスを十分に活用できていないという問題意識を持っており、対応の必要性がそれぞれの組織で懸案事項となっていた。しかしそうした外国人の子育て困難やニーズは、外国人が支援要請をした段階でマジョリティ側に「問題」として認識されることが多い。経済的・社会的に弱い立場にある外国人がマジョリティ側の支援制度やサービスにたどり着くこと自体がそもそも容易ではないため、彼女たちのニーズは家庭という私的領域に埋没し、公共空間では見えなくなりがちである。

2. 外国人家族による子育てサービスの利用と障壁

調査からは、外国人家族の子育てサービス利用を妨げる要因として、日本語力の不足、日本の制度に関する理解不足、マジョリティ文化との齟齬といった言語的・文化的問題と同時に、外国人家族がもつネットワークの脆弱性を指摘できる。市の子育て支援課、保健センター、国際交流協会、保育園の職員は外国人が直面するこうした障壁に対する認識をある程度持っていたものの、財源や人材の不足によって改善策を見いだせない状況にあった。また、言語の壁によるコミュニケーション不全に注目が集中しており、言語以外の文化的齟齬やネットワークの問題によって外国人家族が情報弱者になっていることや、子育てサービスの利用を躊躇していることについては強く認識されていなかった。

3. 外国人家族を制度に結びつける市民団体の役割とその限界

このような状況の中、外国人家族の子育てニーズを見出し、かれらを支援につなげるうえで重要な役割を果たしているのが民間の市民団体である。P 団体は地域の外国人住民の立場に寄り添うことによって行政が対応できないようなきめ細かい支援を行っている。具体的には、外国人家族のための居場所づくりを中心に、「聴く」＝外国人家族の困難やニーズを公共空間で共有する、「繋ぐ」＝外国人家族に必要な制度やサービスを紹介する、「埋める」＝外国人家族の文化とマジョリティ文化の齟齬を調整する（e.g., 通訳・翻訳、他組織の職員との連携）といった活動をボランティア数名から成るチーム体制で行っている。

一方、P 団体のメンバーはボランティアが行政やその窓口である国際交流協会と連携することなく通訳や翻訳を頼まれるままに引き受けることによって、外国人家族の抱える困難やニーズを行政が認識する契機や必要性が失われてしまうことに危惧を覚えていた。市民活動によって外国人家族が地域の諸制度へと結びつくことが可能になっている一方、ボランティア依存とアドホックな支援という問題構造が生じている。外国人家族の子育てニーズは現場レベルで認識されはじめているものの、支援に関する制度的枠組みが不在のまま、職員やボランティアが個々に支援の努力を重ねるという状態が続いている。

4. 「異文化間教育の政策研究」の展望

外国人散在地域において外国人家族の制度的可視性を促進し、家族をホスト社会の子育て制度に包摂していくためには、外国人住民のサービス利用を促す制度の確立を諸組織の連携の中で図ったり、サービスの中身を自文化中心ではなく外国人住民の多様な文化を 수용するものに変えていく施策の必要性が示唆される。なによりもまず、家庭という私的領域に潜在する《見えない》困難やニーズを、マジョリティ側に立つ組織やその構成員が理解し、公共空間で可視化していくことが散在地域の外国人支援施策において問われているだろう。

本報告の事例からは、異文化間教育の政策研究のひとつの課題として、外国人住民の個人化されがちな《見えない》ニーズを、かれらがホスト社会で経験する文化的葛藤や、経済的・社会的障壁といった視点から明らかにしていくことが示唆される。このような研究を実践していくうえでは、現場に入り込み、人々の意味世界を内側から捉えるエスノグラフィの手法が有効である。異文化間教育の政策研究では、調査者自身がミクロとマクロを往還する分析視点を持ち、支援を必要としている人々に寄り添いながらかれらの視点や価値観や困難を理解し、それを行政や支援団体に伝えていく中で文化的多様性に配慮した施策へと繋げていくことが一つの方向性として提起される。

引用文献

- 南野奈津子 2015. 「移民と日本の社会福祉制度」吉成勝男・水上徹男・野呂芳明編『市民が提案するこれからの移民政策』現代人文社、84-96頁。
- Winders, J. 2012. "Seeing Immigrants: Institutional Visibility and Immigrant Incorporation in New Immigrant Destinations" *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 641(1): 58-78.

第 39 回大会企画 公開シンポジウム

主催：新潟大学

共催：異文化間教育学会

日時：6月10日（日）13：00-15：00

場所：新潟大学五十嵐キャンパス

総合教育研究棟 E 棟 E260 教室

「次の世代を地域で育てる」

—異文化間教育の役割—

「異文化」という言葉は、外国人対日本人、自国文化対他国文化、世代の違い、性差という具合に、実に様々なとらえられ方をする。

この新潟の地には、災害という観点から、他ではあまり見られない異文化が存在する。過去に新潟地震（昭和 39 年（1964 年）・マグニチュード 7.5）、中越地震（平成 16 年（2004 年）マグニチュード 6.8）、中越沖地震（平成 19 年（2007 年）マグニチュード 6.8）という 3 つの大きな地震を経験し、平成 10 年、16 年、23 年に新潟豪雨と呼ばれる大雨による水害にも見舞われてきた、新潟県に特徴的な異文化。それは「被災者」と「非被災者」である。ある地域で共生している人々がある日突然、地震・大雨の発生を境に、「被災したか、していないか」という「異なり」を背負った存在になってしまう。

本公開シンポジウムでは、この 2 つのグループ間での情報共有の難しさを取り上げ、次の世代を被災に強い存在にするために、「異文化間教育」がどのような役割を果たせるかについて、議論の場を設けることにした。

被災地から、被災地の周辺の非被災地から、この両者をつなぐ情報を発信し、これからの社会・街づくりに活かしたい。

司会：

卜部厚志（新潟大学災害復興科学研究所・准教授）

発言者：各 20 分程度

1. 羽賀友信（長岡市国際交流センター長）：行政のとりくみ
2. 中野明子（ふるさと未来創造堂）：市民のとりくみ
3. 松岡洋子（岩手大学教育推進機構・教授）：大学のとりくみ

全体討議

※参加費無料、申し込み不要で、どなたでもご参加いただけます。

若手交流会

日時：平成 30 年 6 月 9 日（土）12：00～13：00

場所：新潟大学五十嵐キャンパス 総合教育研究棟 B 棟 B253 教室

若手国際教育家のためのランチ会

—先輩や若手の仲間とともに将来のキャリアについて考える—

2018 年度異文化間教育学会では、若手交流委員会の第 1 回企画として「若手国際教育家のためのランチ会～先輩や若手の仲間とともに将来のキャリアについて考える～」と題して、4 名の先輩国際教育家（原裕視会員、手塚千鶴子会員、太田浩会員、秋庭裕子会員）をパネリストとしてお招きし、多様なキャリアパス、仕事の内容・やりがい・困難などのご経験についてのお話を伺います。後半は、参加者のみなさんからパネリストへの質疑応答を受け付けます。これらを通じて、若手ならではのキャリアについての悩みや不安などを共有するとともに、自身の将来のキャリアについて考え、さらには、参加者同士のネットワーク構築のきっかけとなれればと考えております。自称「若手」の方であれば、どなたでも参加できます。各自で昼食を持ち寄り、昼食を取りながらアットホームな雰囲気での交流をする予定です。ふるってご参加ください。

さらに同日夜には、国際教育家としてのキャリアに関する、若手同士の情報共有やネットワークづくりを目的とした懇親会を別途開催します。夜の懇親会では、キャリアの興味別にテーブルに分かれて、お互いのことをより深く知りつつ、掘り下げた話もできればと思っています。中堅国際教育家もリソースパーソンとして、各テーブルに 1 名程度つく予定です。

■ランチ会（12:00～13:00）

場所：新潟大学五十嵐キャンパス総合教育研究棟 B 棟 B253 教室

プログラム：

- 12:00 - 12:05 開会挨拶
- 12:05 - 12:40 先輩研究者による経験談
- 12:40 - 12:55 質疑応答
- 12:55 - 13:00 アンケート記入・閉会挨拶

■懇親会（19:00～21：00）

場所：葱ぼうず（新潟県新潟市中央区笹口 1-10-1）

*参加者は内野駅 18：10 発、新潟駅 18：33 着（JR 越後線）にご乗車ください。

■パネリスト

原裕視（目白大学心理学研究科教授）

手塚千鶴子（元慶應義塾大学、留学生カウンセリング・留学生日本人共習の異文化コミュニケーション）

太田浩（一橋大学国際教育センター教授）

秋庭裕子（一橋大学商学研究科講師）

■企画・運営

新見有紀子（一橋大学法学研究科講師）

徳永智子（群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部講師）

平井達也（立命館アジア太平洋大学教育開発・学修支援センター准教授）

横田雅弘（明治大学国際日本学部教授）

発表について

研究発表は、以下の種別で行なわれます。発表者、題目、時間帯、会場などの詳細は、それぞれの部会のページをご覧ください。

個人発表

共同発表

ケース／パネル発表

ポスターセッション

■ 発表要領

1. 発表時間（交代時間を含む）

- | | |
|--------------|--------------------|
| A. 個人発表 | 30分（発表20分、質疑応答10分） |
| B. 共同発表 | 60分（発表40分、質疑応答20分） |
| C. ケース／パネル発表 | 90分（発表50分、質疑応答40分） |

※会場での運営は、各グループでお願いいたします。

参加者による質疑応答の時間を確保するようご配慮ください。

D. ポスターセッション

6月9日（土）09:30-12:00

※9:30-10:30の時間帯は必ず在席してください。10:30-12:00は任意の在籍となります。会場は09:00からご準備いただけます。翌日の10日（日）14:30まで掲示をお願いします。

6月10日（日）10:00-15:00

※在席義務時間はありません。

15:00にポスターを撤去して下さい。また、2日目15:30までに撤去されないポスターは、事務局で処分致します。

ポスターパネルのサイズは横120cm×縦170cmです。その範囲内でご準備下さい。

2. 配布資料

- ・ハンドアウトを配布される方は、1発表につき50部程度ご用意ください。なお、大会準備委員会では印刷を受けすることはできませんことを予めご了承ください。
- ・停電などによりPCが使用できない場合にお備えください。

3. 発表に使用する機器等について

- ・PCを使用して発表される場合は、ご自身のノートPCをご持参下さい。接続が上手くいかない場合に備えて、会場でも予備用のPC（windowsのみ）を用意いたしますが、数に限りがあります。MacのPCをご利用の方は、必ずご自身でアダプタをご用意ください。接続動作確認等は、9日（土）は09:30-10:30、10日（日）は09:30-10:00に行ってください。
- ・機材の操作は発表者ご自身で行ってください。
- ・インターネットへの接続には学内wifiがご利用になれますが、ご利用に際しては事前登録が必要です。事前登録をご希望の方は6月1日（金）17:00までに、大会準備委員会宛にメールでご連絡下さい。

4. 発表者欠席の場合

- ・やむを得ない事情により発表者が欠席する場合には、できるだけ前日までに大会準備委員会宛にメールでご連絡ください。
- ・発表取りやめがあっても、プログラムの繰り上げはいたしません。

※第39回大会準備委員会 e-mail: ibunkakan39@gmail.com

異文化間教育学会「優秀発表賞」について

異文化間教育学会では、異文化間教育学の発展を期して、会員の研究発表を奨励し、研究発表の向上を図ることを目的として、「優秀発表賞」を設けています。この賞は、若手の研究者を対象に、当該大会における「個人研究の個人発表」の中から、優秀と評価された発表に与えられるものです。

すでに大会 HP 等でも示してあるとおり、優秀発表賞の審査を受けるためには、発表者自身が受賞資格の条件（注）のいずれかに該当することを申告し、審査対象となる意思を表明する必要があります。

審査方法については、エントリーされた発表ごとに2名の評価者（研究委員会により委嘱）が会場で評価します。選考方法については、学会 HP に掲載してある選考手続きおよび規定に基づき、別途、優秀発表賞審査委員会を設置します。その後、本賞は審査委員会による選考が行われ、理事会の承認を得て決定されます。

「優秀発表賞」の実施にあたり、どうぞ大会参加会員各位のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（注）発表者が応募時に以下のいずれかに該当する場合、受賞資格を有するものとする。

- ・ 大学院修士課程もしくは大学院博士課程に在学中である
- ・ 修士課程修了後 10 年以内である
（複数の修士課程を修了した場合は、最後に修了した修士課程が対象）
- ・ 最終学歴が学部卒業の場合は、卒業後 12 年以内である

修了後の期間は、卒業・修了月の末日を終了日として起算する。例えば、大学院修士課程修了者で、3月修了の場合は、3月31日を修了月として、10年後の3月31日までが受賞資格を有する期間とする。

異文化間教育学会
理事長 佐藤郡衛

研究発表プログラム

個人発表

6月9日(土)	10:30-12:00	B350/B352/B354/B356/B358 教室
6月10日(日)	10:00-12:00	B350/B352/B354/B356/B358 教室

ケース／パネル発表

6月9日(土)	10:00-12:00	B351/B353/B355/B251 教室
---------	-------------	------------------------

共同発表

6月10日(日)	10:00-12:00	B251/B253/B351/B353/B355 教室
----------	-------------	-----------------------------

ポスターセッション

6月9日(土)	09:30-12:00	2階教室前廊下
6月10日(日)	10:00-15:00	2階教室前廊下

個人発表

B350

6月9日

司会：野山広（国立国語研究所）

10:30—11:00 **グローバル化する社会における日本の「夫婦同姓」の問題**
—大学生の当事者意識を高める方策—

高橋 美能（東北大学）

11:00—11:30 **個人別態度構造分析による異文化観に関する心象の一考察**

前田 ひとみ（目白大学外国語学部英米語学科）

11:30—12:00 **ホスト国と難民の社会的結束のための実践に関する意義と課題**
—トルコを事例として—

岸 磨貴子（明治大学）

個人発表

B352

6月9日

司会：鎌田美千子（宇都宮大学）

10:30—11:00 **教員養成課程における「特権に気づくための教育」の試み**
—「特権を考えるワーク」実践の検討を通して—

渋谷 恵（明治学院大学心理学部）

11:00—11:30 **小学校英語教育を通しての異文化理解：新教材における**
文化的コンテキストと子供の気付き

大谷 みどり（島根大学教育学部）

11:30—12:00 **難民の物語から考える排除と共生についての学び**
—ドイツの現実に向き合う Anne Frank Zentrum の異文化間教育プログラム—

伊藤 亜希子（福岡大学）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

個人発表

B354

6月9日

司会：花井理香（関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科）

10:30—11:00

「多文化共生」概念の可能性と課題—保育実践からの示唆—

長江 侑紀（東京大学大学院教育学研究科）

11:00—11:30

ラフカディオ・ハーン『飛花落葉集』と『怪談』における「待つ」の構図の比較

秦 裕緯（熊本大学大学院社会文化科学研究科）

11:30—12:00

**海外派遣留学プログラムを通して育む異文化理解
—異文化理解の解釈の再考と学びの可能性—**

筆内 美砂（立命館大学国際教育推進機構）

個人発表

B356

6月9日

司会：鈴木京子（首都大学東京国際センター）

10:30—11:00

留学生・日本人学生の話し合い活動における意見提示場面の相互行為分析

山田 明子（九州大学留学生センター）

11:00—11:30

**留学生、日本人学生、地域社会の異文化交流による親密性の深化
- ウチとソトの境界を流動的に捉え直すしかけづくり -**

阿部 祐子（国際教養大学）

11:30—12:00

**日本企業における日本人上司の中国人部下に対するネガティブ・フィードバックに
関する研究 —日本人上司のコミュニケーションスタイルに着目して—**

王 澍（武蔵野大学大学院）

個人発表

B358

6月9日

司会：佐藤裕紀（新潟医療福祉大学）

- 10:30—11:00 日本企業における中国人社員の職場での文化的差異の受容プロセスに関する研究
稲垣 奈津実（武蔵野大学大学院言語文化研究科）
- 11:00—11:30 異文化間コミュニケーション授業の意義
—多国籍学生が学ぶ大学院大学での授業—
石橋 道子（国際大学）
- 11:30—12:00 アメリカ・サンフランシスコの日系・日本人社会の変容
田中 真奈美（東京未来大学モチベーション行動科学部）

個人発表

B350

6月10日

司会：筆内美砂（立命館大学国際教育推進機構）

- 10:00—10:30 アジア人留学生と国際化—東京福祉大学における試み—
越野 香子（東京福祉大学）
- 10:30—11:00 中国人私費留学生のアルバイトの目的と職種がアルバイトの肯定感に及ぼす影響
黄 美蘭（首都大学東京国際センター）
- 11:00—11:30 学習支援に従事した留学生の経験と学び—インタビュー調査に基づく検討
潘 英峰（大阪大学国際教育交流センター）
- 11:30—12:00 大学の国際化政策と留学生の満足度の検証
榊 祐子（筑紫女学園大学）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

個人発表

B352

6月10日

司会：伊藤亜希子（福岡大学）

10:00—10:30

グローバル人材育成の場としての混住寮
—教育的介入に着目して—

吉田 千春（明治大学大学院 国際日本学研究科）

10:30—11:00

想像する異文化間の境界：大学における空間と言語を用いた他者化

小林 聡子（千葉大学）

11:00—11:30

ノルウェー人と日本人の独立心に対する考え方の比較
—真のグローバル人材育成の示唆を得るために—

鈴木 京子（首都大学東京国際センター）

11:30—12:00

地球市民性と複眼的思考

—異なる価値の葛藤解決に向けたグローバルコンピテンシーの育成課題

小林 亮（玉川大学 教育学部）

個人発表

B354

6月10日

司会：松岡洋子（岩手大学）

10:00—10:30

英語教育と異文化適応 — 学生から見た語学教育

大味 潤（東京経済大学経済学部非常勤）

10:30—11:00

中国と日本の大学生の学ぶ外国語選択の動機と要因に関する一考察
—ドイツ語を対象にして—

馬 云霏（京都大学人間環境学研究科）

11:00—11:30

常設化されたキャンパスアジアにおける多言語発達と多言語使用

湯川 笑子（立命館大学文学部）

11:30—12:00

学習経験の浅い成人移住者へのドイツ語教育

—教科書分析と実践から探る学習時の困難と学習促進方法

井上 百子（Eberhard Karls Universität Tübingen AOI Abteilung für Japanologie）

個人発表

B356

6月10日

司会：岡村郁子（首都大学東京）

- 10:00—10:30 学習者と母語話者の日本語の「良い文章」判断基準の差異
—中国中上級学習者を中心に—
余 文龍（京都大学人間環境学研究科）
- 10:30—11:00 日本語を第二言語とする子どもたちへの学習支援におけるパラフレーズの問題
—社会文化的な背景知識を必要とする場合と必要としない場合—
鎌田 美千子（宇都宮大学）
- 11:00—11:30 外国人児童生徒のキャリア形成のプロセス—自己効力感獲得の重要性—
奥山 和子（神戸大学人間発達環境学研究科）
- 11:30—12:00 海外の日本語補習授業校における国語教育の課題
—教員へのアンケート調査からの—考察—
金子 浩一（宮城大学）

個人発表

B358

6月10日

司会：岸磨貴子（明治大学）

- 10:00—10:30 コミュニティと言語使用—在韓日本人母コミュニティの継時的調査から—
花井 理香（関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科）
- 10:30—11:00 多文化環境におけるアイデンティティ
—日台ダブルのライフストーリーを—事例として—
青木 香代子（茨城大学）
- 11:00—11:30 定住外国人の日本語使用と言語生活に関する縦断調査の在り方に関する—考察
—OPIの枠組みを活用した現場生成型のフィールドワークを事例として—
野山 広（国立国語研究所）
- 11:30—12:00 日本人大学生の異文化間コミュニケーション学習動機と授業内実践への適用
中川 典子（流通科学大学 人間社会学部）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

共同発表

B351

6月10日

司会：齋藤ひろみ（東京学芸大学）

10:00—11:00 **異文化での定住に向けて：その実態と関与因**
—EPA 看護師候補者として来日したインドネシア人の場合—

箕浦 康子 （お茶の水女子大学）
浅井 亜紀子 （桜美林大学リベラルアーツ学群）

11:00—12:00 **異文化体験と帰国後のキャリア**
—元 EPA 看護師候補者として来日したインドネシア人の場合—

浅井 亜紀子 （桜美林大学リベラルアーツ学群）
箕浦 康子 （お茶の水女子大学）

共同発表

B353

6月10日

司会：尾中夏美（岩手大学）

10:00—11:00 **大学の国際化が地方社会に与える影響と大学に期待される役割**
：留学生の子どもの学習支援をめぐる

岸田 由美 （金沢大学理工学域留学生教育研究室）
宮崎 悦子 （金沢大学）

11:00—12:00 **長期留学（学位取得目的）と短期留学（単位取得目的等）の**
効果・学習成果の比較分析
—海外留学経験者に対する回顧的追跡調査の結果から—

新見 有紀子 （一橋大学）
秋庭 裕子 （一橋大学商学研究科）
太田 浩 （一橋大学）
横田 雅弘 （明治大学国際日本学部）

共同発表

B355

6月10日

司会：渋谷真樹（奈良教育大学）

10:00—11:00 **インドネシア料理店運営者から見た外国人集住都市安山
—聞き取り調査の結果から—**

吹原 豊 （福岡女子大学）
 松崎 真日 （福岡大学）
 磯野 英治 （名古屋商科大学）
 助川 泰彦 （東京国際大学）

11:00—12:00 **多文化小集団によるフィールドトリップ活動におけるソーシャルスキルの獲得**

秦 喜美恵 （立命館アジア太平洋大学教育開発・学修支援センター）
 中野 祥子 （山口大学留学生センター）
 田中 共子 （岡山大学）

共同発表

B251

6月10日

司会：浜田麻里（京都教育大学）

10:00—11:00 **ヒューマンライブラリーの多様性とその効果**

横田 雅弘 （明治大学国際日本学部）
 坪井 健 （駒澤大学文学部社会学科）
 工藤 和宏 （獨協大学）

11:00—12:00 **異文化間教育における批判的観点の重要性
—「異」と「文化」の陥穽から抜け出すには—**

オーリ リチャ （千葉大学）
 杉原 由美 （慶應義塾大学）

個人

共同

ケース／パネル

ポスター

共同発表

B253

6月10日

司会：中川祐治（福島大学）

11:00—12:00 日本とデンマークにおけるヒューマンライブラリー実践の比較分析
：社会的・文化的背景に着目して

佐藤 裕紀 （新潟医療福祉大学）

照山 絢子 （筑波大学）

ケース／パネル発表 B351 6月9日

10:30—12:00 在外教育施設における教育の新しい展開

共同発表者	渋谷 真樹 (奈良教育大学)
共同発表者	見世 千賀子 (東京学芸大学国際教育センター)
共同発表者	近田 由紀子 (文部科学省初等中等教育局国際教育課)
共同発表者, 司会者	岡村 郁子 (首都大学東京)
ディスカッサント	佐藤 郡衛 (明治大学)

ケース／パネル発表 B353 6月9日

10:30—12:00 ありのままの自分を求めて: グローバル化社会におけるアイデンティティと「居場所」

共同発表者, 司会者	鈴木 一代 (埼玉学園大学人間学部)
共同発表者	津田 友理香 (国立国際医療研究センター小児科/四谷ゆいクリニック)
共同発表者	徳永 智子 (群馬県立女子大学)
共同発表者	小林 亮 (玉川大学 教育学部)
ディスカッサント	佐野 秀樹 (東京学芸大学教育学部教育心理学講座)

ケース／パネル発表 B355 6月9日

**10:30—12:00 多文化教育を担う教員の資質・能力の育成
—アメリカ、ドイツ・スイス、そして日本の動向と展望—**

共同発表者	浜田 麻里	(京都教育大学)
共同発表者,司会者	齋藤 ひろみ	(東京学芸大学教育学部)
共同発表者	森茂 岳雄	(中央大学文学部)
共同発表者	中山 あおい	(大阪教育大学)
共同発表者	金田 智子	(学習院大学文学部日本語日本文学科)
共同発表者	川口 直巳	(愛知教育大学)
共同発表者	菅原 雅枝	(東京学芸大学 国際教育センター)
共同発表者	中川 祐治	(福島大学人間発達文化学類)
共同発表者	仲本 康一郎	(山梨大学教養教育センター)
ディスカッサント	市瀬 智紀	(宮城教育大学)
ディスカッサント	河野 俊之	(横浜国立大学教育学部)

ケース／パネル発表 B251 6月9日

10:30—12:00 留学生とともに学ぶ国際共修：効果的な授業実践へのアプローチ

共同発表者,司会者	末松 和子	(東北大学)
共同発表者	尾中 夏美	(岩手大学)
共同発表者	黒田 千晴	(神戸大学国際連携推進機構国際教育総合センター)
共同発表者	米澤 由香子	(東北大学国際連携推進機構)
ディスカッサント	北出 慶子	(立命館大学)

ポスター発表

2階教室前廊下

6月9日： 9：30～12：00

6月10日： 10：00～15：00

1日目 9:30-10:30 のポスターセッションについては、発表者に必ず在席していただきます。

1日目 10:30-12:00、2日目 10:00-15:00 のポスターセッションは、任意の在席となります。

1. 多文化就労場面における元留学生の葛藤解決方略と規定要因

—葛藤内容、労働価値観、就労意識に着目して—

加賀美 常美代（お茶の水女子大学基幹研究院）

小松 翠（お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所）

黄 美蘭（首都大学東京国際センター）

岡村 佳代（聖学院大学）

2. 国際共修における振り返りの意義—効果的な授業運営のために—

藤 美帆（広島修道大学）

3. 日本語を母語としない乳幼児の発達に関与する要因—フィールドワークによる予備調査から—

塘 利枝子（同志社女子大学）

4. ベトナム難民第2世代のライフストーリー

河先 俊子（国士舘大学21世紀アジア学部）

5. 大学の専門教育における異文化間教育の実践

—ワークショップデザインによる学びと相互作用の分析—

島田 徳子（武蔵野大学）

神吉 宇一（武蔵野大学）

藤本 かおる（武蔵野大学）

6. 日本の高等教育機関における留学生教育支援体制のあり方を考える

有川 友子（大阪大学国際教育交流センター）

7. 異文化間コミュニケーション教材の開発とその試用

—オリジナル教材『渡航前アサーショントレーニング』を用いて—

園田 智子（群馬大学国際センター）

8. 移民受け入れ社会における教育人材育成—ドイツの統合コースの言語教師トレーニングからの一考察

松岡 洋子（岩手大学グローバル教育センター）

9. 多文化教員としてのピリーフの形成

河野 俊之（横浜国立大学教育学部）

10. 作文に見る低学年外国人児童の社会性—意見文の縦断的分析を通して—

三好 大 (東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)

工藤 聖子 (東京学芸大学 教務補佐)

村瀬 玲 (神田外語キャリアカレッジ)

菅原 雅枝 (東京学芸大学 国際教育センター)

齋藤 ひろみ (東京学芸大学教育学部)

11. 留学生のためのマインドフルネス導入に向けた予備調査からの考察

小松 由美 (東京外国語大学大学院国際日本学研究院)

12. 教員養成大学におけるボランティア学生募集の取り組み

川口 直巳 (愛知教育大学)

遊佐 美和子 (愛知教育大学外国人児童生徒支援リソースルーム)

夏目 礼子 (愛知教育大学外国人児童生徒支援リソースルーム)

五反田 智美 (愛知教育大学)

13. タブー視されやすいテーマを取り上げた実践から見えたもの

—戦争にまつわる日本語の連続授業を例に—

萩原 秀樹 (インターカルト日本語学校)

14. 在日ベトナム人留学生の食の文化受容にみるコミュニティ型適応

中野 祥子 (山口大学留学生センター)

田中 共子 (岡山大学)

15. 日本語学習の場におけるボランティア学生の学び —「日本語クラスゲスト」経験者の参加動機より—

池田 智子 (桜美林大学)